

元年・一八〇四）に於いても、①たのむは帰命の義②欲生は信楽の相であるという理解をそのまま踏襲している。同時に信相には隠顕が存在し、信と願とでは一つの法を異なる角度で見ているに過ぎないと言う。あくまでも真因は信心歓喜の一念に決定するのだが、願心は信楽の隠顕した相なのであり、信楽の一念の時にその願心が相となって顕れると説くのである。つまり信楽の相が願心であり、信楽には必ず願心を具しているから、単信楽ではなく単欲生でもない、まさに「正中」と名付けて自説を展開するのである。

さらに『摧邪篇』でも使用している比喩表現「煙（欲生）火（信楽）の譬え」を『正中録』の随所にも多用していることから、二書は同一の教学的基盤であると推測出来よう。

他方、社会状況を見れば惑乱の大勢は既に決着していることを察し、願生帰命説と信楽帰命説との論理的折衷を図ろうと苦心したのが『正中録』著述の真意とも考察出来る。それ故、此の書の論説に於いては、単信を批判する箇所何倍もの数量を単欲批判に充てざるを得なかったであろう。

以上の事実から、彼は古来より信楽派の間で喧伝されてきたような『横超直道金剛鐱』を見て翻然と廻心したとは言えない。加えて『正中録』と同年（文化元年・一八〇四）に『帰命弁』擁護の書『帰命弁略会義』を出版していることから勘案しても、彼が帰正したとは考え難いのである。成程願生派の主張通り、彼には捨邪帰正の事実認められない。

実直に願生帰命説を信奉し、恩師功存を擁護したことは明白な真実であるが、その願生帰命説そのものが正義であるか否か

については、さらに論義・研鑽を要するであろう。

環中は惑乱の結末を見ずに、文化三年（一八〇六）に六十五歳で示寂したのである。

七百五十回忌の親鸞像私考

御手洗 隆 明

二〇一一年の親鸞七百五十回忌（御遠忌・大遠忌）は後世にどのような親鸞像を遺すのであろうか。ここでの「親鸞像」とは、歴史上の人物として研究された、あるいは著述や伝承されてきた物語の中から読み取られた人間像をいう。

近世以降、浄土真宗の各派と真宗門徒は、五十年毎におとずれる親鸞の遠忌を契機としてさまざまな親鸞像、真宗像を遺してきた。今回の七百五十回忌は従来の親鸞像に何を付け加え、どのような宗教者像を描いて後世に伝えるのであろうか。今回も遠忌を目標にして、真宗各派や多くの人々が親鸞についての積年の課題に向き合い、多彩な成果を成してきたが、まだ七百五十回忌を象徴するような親鸞像は見えていないと思われる。さらに、三月十一日の東日本大震災と原発事故を境として日本社会は一変し、遠忌法要を執行すること自体が問われたことは記憶に新しい。真宗各派の遠忌や関連行事はまだ続くのであるが、ここで一度、親鸞像について考えておくことは無駄ではないように思う。

過去、遠忌を機縁として様々な親鸞像が語られてきた。本願

寺では三十三回忌の頃には本願寺の祖師として、二百回忌(一四六一)の頃には如来の化身である浄土真宗の開山聖人として、近世には遠忌を契機として宗祖としての親鸞像が、あるいは超人的で貴族的な親鸞像として、宗派の内外で流布されている。真宗各派が拡大し、宗派意識が高まり、社会的な影響力を持つとともに、そこで描き出される親鸞像にも変化が見受けられる。また、遠忌を契機として真宗各派がそれぞれの宗祖像を発信し、宗門外でも芸能や出版によって民衆が語る親鸞像が登場するなど、五十年毎の遠忌を強く意識することが定着したのも近世(江戸時代)である。

近代になると、六百五十回忌(一九一一)の頃は近世親鸞像の影響を残しながらも史実に基づいた親鸞像が志向され、七百回忌(一九六一)では史実としての親鸞像が追求され、戦後という時代を色濃く反映した、反権力的で民衆的な親鸞像が主張され、現在にも遺る。そして七百五十回忌では、史実としての親鸞像の更なる追求とともに、近世親鸞伝(伝承史料)において語り伝えられた親鸞像も再び注目されている。真宗八百年の歴史を、真宗門徒八百年の信仰史として捉えることで、現代の感覚では夢物語と見なされる奇瑞伝説を記した書であっても、本願他力の世界に導く教義書として認めるという、古くそして新しい視点を蘇らせたのである。この奇瑞・奇跡を起こす超人的親鸞像をどのように理解するかは近世以来の課題でもあるが、それは遠忌が過ぎると集約されることなく忘れられる傾向にある。親鸞伝の一分野として体系化することが当面の課題となろう。

三月十一日の震災は、後世に伝えられるであろう親鸞像にどのような影響を与えるのであろうか。遠忌の場では、震災によって噴出し、突き付けられた課題について宗祖としての親鸞に応答しようという姿勢が見受けられた。そこでは、親鸞が災害に遭った同行たちへ送った文応元年の乗信宛消息(『末灯鈔』六)、『歎異抄』第四章などの遺訓をどのように受けとめるかが真宗門徒の課題となった。また、江戸時代に発生した災害や飢饉に直面した真宗門徒の生き様(砺波門徒など北陸門徒の東国移住)も、歴史の中から読みとられたものである。これまでの遠忌で顕れた親鸞像を考察することに加え、震災以降の社会の激変においてどのような親鸞像が、また真宗像が浮かび上がるのかということが、今回の考察である。

浄土真宗と現代社会

林 智 康

今年から来年にかけて、浄土真宗の開祖親鸞聖人七百五十回大遠忌(御遠忌)法要が厳修されている。真宗十派(真宗教団連合)においては、それぞれ法要のテーマ・基本理念を掲げている。法要を迎えるにあたって、各派とも、親鸞聖人の生き方、教えを学ぶとともに、現代の一番大きな問題である生命(いのち)について考える傾向が見られる。

現代、死生観・死生学(thanatology)という言葉が注目されている。サナトロロジー(タナトロロジー)は死が根本にあって